

日本フランス語学会 ニューズレター 第12号 2004年6月1日

日本フランス語学会編集委員会発行

目 次

1. 事務局より
2. 昨年度の編集責任者より
3. 新編集委員のプロファイル
4. 本年度の編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 今後の例会予定
7. 各地の研究会だより
8. 追悼 三宅徳嘉先生, 田島宏先生
9. フランスの若手・中堅研究者紹介
10. フランスのメーリングリスト紹介
11. エッセー 電子辞書の光と影
12. 編集後記

1. 事務局より

事務局は引き続き慶應義塾大学に置かれています。

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学 来往舎内

日本フランス語学会事務局

sjlf-jimu [アットマーク hc.cc.keio.ac.jp](http://www.hc.cc.keio.ac.jp)

事務局への連絡は、郵便または電子メールでお願いいたします。

・住所変更について

住所変更などがある場合は、速やかに事務局までご連絡ください。転居先不明で郵便物が戻ってくるケースがあります。

・会費の納入について

会費は、春の仏文学会の際に設置される語学会専用の受付で直接ご納入いただくことができますが、それ以外の場合は郵便振替でお願いしております。

郵便振替口座 00160-6-56308

また、2年以上会費を滞納されますと、3年目からは学会誌の送付を停止させていただきます。郵便振替用紙のみ送付させていただきます。

・学会誌が未着のとき

過去の会費をご納入いただいたにもかかわらず学会誌をお受け取りになっていない場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。複数年の会費を一度にまとめてお支払いいただいた場合に時折このような問題が発生します。ただし入会された年度以前のバックナンバーをご希望の方はフランス図書(03-3346-0396)まで直接お問い合わせください。

・退会について

退会を希望される方は、事務局まで郵便か電子メールでご連絡ください。特別な書式などはございません。なお、退会希望をご連絡いただいた年度の会費はご納入いただくことになっておりますのでよろしくご了承ください。

・留学中の方へ

留学などで日本を離れている方への学会誌送付や様々なご案内は日本国内の連絡先に限らせていただきますのでご了承ください。

2. 昨年度の編集責任者より

このニューズレターをお読みの会員の皆さまのお手元には既に『フランス語学研究』(頭文字をとってBELFと呼んでいます)の第38号が届いていることと思いますが、この原稿を書いているのは5月1日のメーデーで、校正は目下進行中です。校正で大きな誤りをしていないだろうか、カウントダウンも既に30日を切った白百合女子大学での日本フランス語フランス文学会大会に間に合わなかったら大変なことだ、などつい思いがもつれてしまいます。ゴールデンウィークの翌週には大体のところ編集作業のすべてが(hopefully)終了します。

編集委員会が全面改組されたのが19号の出た1985年で、2004年はちょうど20年目にあたります。BELFはこの38号を節目として2005年に刊行予定の39号からの編集方針を2点ほど改めましたので、ご紹介しておきたいと思います。

まず、投稿締め切りが11月末日から10月末日に変更されます。これは投稿原稿の審査に今まで以上に時間をかけて綿密に行って投稿者へのサービスを向上し、また編集作業をより円滑に行うことを可能にします。

2つ目は論文等での参考文献の書式の統一です。新しい書式は本38号の展望で採用されていますのでご参照ください。39号は「海外雑誌論文目録」などの例外を除くすべてのジャンルでこの書式を採用することになります。BELF掲載が決定した投稿者には細則をお渡しする予定です。最も目立つ点としては、今まで参考文献の出版年にカッコをつけた後コロンを入れていましたが、このコロンを廃止してコンマにしたことでしょうか。そこで、今まで Pruvost, J. (2003): *Les néologismes*, Paris, PUF. と書いていたのが、Pruvost, J. (2003), *Les néologismes*, Paris, PUF. となります。初めはどうしても戸惑いますが、慣れてしまえば新しい書式の簡略さが有難く思われます。

今回編集業務に携わっていて、BELFがいかに会員の皆さまに負っているかを改めて痛感しました。新たな知見を論文などの形で発表する、さまざまな研究、意見や論点などを分かりやすく解説したり紹介する、またフランスを始め海外での活動を直接経験して報告する、これらのさまざまなジャンルでの投稿が雑誌を支えています。若い研究者の方々にも、初めは自分にとって書きやすいジャンルから初めてくださって良いわけですが、意欲的な投稿をお願いします。1度の投稿で止めてしまうのではなく、何度にもわたって投稿することで少しずつ慣れていくことが肝要です。

また読者の方々には雑誌についてご意見がありましたら事務局または編集委員にお寄せいただきたいと思います。

昨年度から計画が持ち上がって今年度を実現した活動として、東京都立大学に関するfrenchling上での署名活動がありました。多くの会員そして非会員の方々から署名をいただき、またエールをお寄せいただきましたことを深く感謝いたします。4月26日に東京都知事および東京都大学管理本部長に開かれた議論を要望する旨の文書を署名リストを加えて送付いたしました。ただし未だに不透明な成り行きには不安を感じざるを得ませんので、今後も注意深く見守っていく必要があると考えています。

最後に編集委員会の構成についてお話しさせていただきます。昨年度をもって藤村逸子氏とFrance Dhome氏がお引きになりました。編集に精力的に関わってきてくださったお2人にこの場を借りてお礼を申し上げます。次に、本年度から新たに曾我祐典氏と大久保朝憲氏が参加されることになりました。曾我氏は既に編集委員として活躍していただいたことのあるベテランです。大久保氏は初めて編集の仕事に参加していただくこととなりますが、会員の方々にはご支援のほどをお願いしたいと思います。

また本年度から阿部宏氏が関東の、井元秀剛氏が関西の、例会やシンポジウムなどを中心的に企画する運営委員として着任されました。お2人とも語学会の運営について良くご存知なのでお気軽にご相談ください。

本年度のBELF編集責任の任は渡邊淳也氏が引き受けてくださいました。編集委員会は渡邊氏を中心にBELFをますます皆さまのご期待に答える雑誌にしていきたいと思っておりますので、よろしく願いもうしあげます。

(川口順二)

3. 新編集委員のプロファイル

編集委員会の構成員は世代、地域、専門領域などのバランスを考えながら、毎年数名づつ交代することになっています。編集委員のリストは『フランス語学研究』の奥付に記されていますが、ここでは今年度あらたに編集委員に就任された曾我祐典氏と大久保朝憲氏に簡単な自己紹介をお願いします。

~~~~~

曾我祐典（関西学院大学）

編集委員として発揮できる力も使える時間も十分ではないのですが、ことばについて考える楽しさを共にできる人（とくに若い人）がもっと増えるように努めなければと思っています。

フランス語を始めたのは東京外国語大学で、田島宏先生が指導教授でした。修士在学中にParis IIIに留学したときは、言語学・文学の講義も面白かったけれど、フランス語力を伸ばすことを優先させました。

フランス語教員になってからは、学生が表現感覚を養って相手に適切な働きかけができるようになる手助けをしてきたつもりです。実は、何をどのように扱えばよいかよく分からないまま試行錯誤を重ねてきただけで、せっかく疑問を抱いてくれる学生にうまく説明できないことの多いも

どかしさは変わりません。所属している仏文専修（定員63名）では3年生になるときに文学と語学のどちらかを学生が選ぶことになっていて、だいたい半分づつに分かれます。30人以上がフランス語学の卒論を書くわけです。修士論文・博士論文を準備中の院生もいますから、同僚二人と分担するとはいえ、指導教授らしく振舞うにはやはり学識が足りません。

こういうわけで、フランス語学をつづけているのはなんとか教員としてやっていくのに必要だからです。もちろん、面白いからでもあるのですが。とくに興味を抱いているテーマはモダリティで、Paris IVのB. Pottier教授やEHESSのI. Tamba教授のゼミに参加したり、Marne-la-Valléeで関連する授業をしたりしてきました。最近はおもに認知動詞・伝達動詞の機能を調べているのですが、「人間はなんと柔軟で、なんと素晴らしいのだろう!」と実感しています。

~~~~~

大久保朝憲（関西大学）

今年度から編集委員に加えていただきました。学会誌編集委員の業務はこれがはじめてですが、よりよい雑誌づくりのために全力をつくしたいと思っています。

学生時代は、認知言語学におおいに興味をもち、フランス語の文法や語彙について研究していましたが、留学生活から現在にいたる中で、argumentation という観点から言語現象を分析する方法に興味を深め、いわゆるトートロジーや矛盾文、隠喩や誇張的な表現などについて研究しています。もちろん、もっとフランス語に特有の具体的な文法や構文などの問題にも深い関心をいただいています。

勤務先の大学では、語学の授業で初級・中級の作文の授業を担当することが多いのですが、学生が提案する、こちらが思いもよらないようなさまざまな作文例の添削に奮闘しながら、いつも、フランス語の語彙と文法の奥深さにおどろかされています。また、大学のほかの授業で、「ことばとジェンダー」といった問題について講義したときに、学生から意外に活発な反応があったことがきっかけで、最近、フランス語の言語構造とジェンダーの問題、また、批判的談話分析 analyse critique du discoursの観点からの、ジェンダー的な言説の分析について勉強中です。近代の言語学は、「ことばとはかくあるべき」という規範文法を克服して、記述文法的な視点をもちうるようになったと言えますが、それと同時に、記述されたことばのありさまについての「判断」を保留した上で、「規範」と同時に「批判」もまた、放逸してしまったかもしれません。これを言語学のもとに回復させようとするような理論的潮流が、従来の社会言語学とはちがったパラダイムから立ち現れてきたことで、言語研究のありかたに大きな問題提起がなされているのではないかと考えることが多くなりました。

本来イデオロギーから自由であるはずがない言語を研究対象としつつも、(BELF掲載論文に代表される)客観的・科学的な記述を標榜する現代の言語研究が、今後どのような可能性をもちうるかということを考えながら、尊敬する研究者であるほかの編集委員の方々とともに、力をつくしたいと考えています。

4. 本年度の編集責任者より

当初の予定とはちがったかたちで、思いがけず39号(2005年発行)の編集責任者をつとめることになってしまいました。昨年末の編集委員会でそれが決まってからというもの、あまりの重責に恐れおののいております。編集委員のみなさま、会員のみなさまのご協力をあおぎながら、なんとかつとめたいと思いますので、今後なにとぞよろしくお願い申し上げます。

さて、39号からは、編集の日程に大きな変更がくわることになりました。とくに投稿を予定しておられる方々にとっては重要な変更ですので、重複をおそれず申し上げますが、投稿のしめ切りが1か月早まり、10月末になりました。どうかこの点には充分にご注意ください。このように変更したもっとも大きな理由は、従来、学会誌への掲載がきまってから、決定稿を出していただくまでの猶予がみじかく、とりわけ査読コメントにより大きな変更を要請されている場合、じっくりと書きなおすことができないという問題を解決したいということです。共著の投稿も増えてまいりましたが、共著者のあいだでの相談もこれまでよりは多くできることと思います。また、査読する側でも、従来よりは少し時間をいただき、複数の査読者間での意見調整やコメントの整理をいっそう緻密にして、よりわかりやすい形で結果を提示できるような方策をとることになりました。

このように、編集委員会としてはさまざまな取り組みを行っているつもりですが、充実した学会誌が発刊できるかどうかは、なによりも、多くの投稿が集まるかどうかにかかっています。今年も、例会で発表なさる方はもちろんのこと、それ以外の方も、積極的に投稿をしてくださることを期待いたしております。また、ときによっては、論文以外のカテゴリーの投稿が、やや少ない場合もあります。内容的にも、形式的にも、多様な投稿をお寄せいただければ、編集にたずさわる者としては、なによりのよろこびです。どうぞよろしくお願い申し上げます。(渡邊 淳也)

5. 運営・企画担当より

2002年4月より2年間、関東地区の企画・運営を担当して来ましたが編集委員をはじめ学会員の皆様のご協力により何とか無事に任期を終えることができそうです。ここに改めて深く御礼申し上げます。

2003年度はシンポジウム「語りのストラテジー」が5月31日、獨協大学にて開催されました。『フランス語学研究』第38号の「シンポジウム報告」をご覧ください。また、3月27日、早稲田大学にて特別例会としてClaude Muller (Université de Bordeaux III), Les relatives prédictives en françaisが開かれました(司会:古川直世)。

2004年度は5月28日、白百合女子大学にてシンポジウム「ソシユール研究の現在」が開催されます。その他の例会について、2003年度は『フランス語学研究』第38号の「例会報告」を、2004年に関しては次項を御覧下さい。

特にインターネットのお陰で、私がフランス語学会例会に足を運び始めた二十数年前とは扱えるデータの量、目に

することのできる研究の数が比較にならないほど増大して、研究を進める環境も相当向上しました。例会発表にもそうした事情が強く反映されています。同時に、人文科学の根幹である、自ら問題を掘り起こし、データを検証し考え抜くという姿勢を貫くことが今後、ますます重要になることは疑いを容れないように思われます。

ところで、今年度から、学会誌への原稿締め切りが例年の11月末から10月末に早まったという学会運営上の重要な変更点があります。雑誌の質をよりレベルアップするためにはどうすればよいか、編集委員会で議論の末の決定でした。投稿をお考えの方は、日程をお間違えにならないようによくお願い致します。

毎月の例会が本学会の将来と日本のフランス語研究のためにも今後一層充実したものなることを祈らずにはいられません。学会員の皆様の変わらぬご協力をお願い申し上げます。

最後に、2004年4月から企画・運営は阿部宏・大久保伸子(関東)、井元秀剛・木内良行(関西)が担当します。

(M.K.)

6. 今後の例会予定

6月19日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

守田貴弘(東京大学大学院):非現実の概念と接続法

出口優木(京都大学大学院):連想照応-ステレオタイプをめぐって-

司会:渡邊淳也(玉川大学)

7月10日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

芦野文武(慶應大学大学院):フランス語における相互構文

秋廣尚恵(EPHE):直接目的語が現れない他動詞構文

9月25日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

奥田智樹(名古屋大学)

1名未定

10月24日(日) 京大会館

小田涼(京都大学大学院):フランス語名詞句のuniquenessについて

1名未定

11月6日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

2名未定

12月(日未定) 上智大学

特別発表, ルイズ=ティノコ(上智大学)

1名未定

7. 各地の研究會だより

フランス言語学を一緒に勉強する会

慶應義塾大学三田キャンパス(通常は大学院棟353A教室)

で月一回、土曜の15時-18時に開いています。完成した研究というよりも、発表者の提供するテーマをどのように発展

させたらよいかを参加者全員で考えることを主眼とした集まりで、毎回大変刺激的なものとなっています。興味のある方はどうかご参加下さい。また、発表を希望する方は世話人、川口順二、大久保伸子、前島和也まで御連絡下さい。
jnkawa アットマーク attglobal.net, okubo アットマーク mx.ibaraki.ac.jp
kazuyax アットマーク econ.keio.ac.jp
(M.K.)

4月17日

中尾和美 (東京外国語大学講師), 「<名詞 + 名詞> 構造と認識 - canicheとboa及びserpent, reptileとanimalの比較から -」

5月15日

芦野文武 (慶応義塾大学大学院) 「フランス語の相互構文」

6月12日

高田大介 (早稲田大学講師) 「題未定」

7月17日

伊藤達也 (パリ第10大学博士課程) 「題未定」

勉強会が始まって今年で12年になります。昨年度末で世話人の一人である藤田が交代し、今年度から新たに前島和也氏にオーガナイズに加わっていただくことになりました。11年間、至らない点が多かったかと思いますが、途絶えることなく年8回のペースを守ってこられたのは、参加して下さった方々のご理解とご協力の賜です。心からお礼申し上げます。今後も自由な耳学問と知的交流の場として勉強会が続いていくことを願っております。(F.T.)

関西フランス語研究会

月1回、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。これまでは大阪日仏センターで行ってききましたが、今年は当分の間、関西大学で行っていく予定です。気楽な会ですので言語学に興味のある方でしたらどなたでもいらしてください。こ一年では次のような発表がありました。

4月例会

高橋克欣「フランス語の未来時制に従属する半過去 — アスペクト・視点・叙実性 —」

6月例会

東郷雄二「Des touristes, il y en a plein à Kyoto. — 不定名詞句はほんとうに主題化できないのか」

7月例会

安達博明「finirと「終える」」

9月例会

林博司「日本語の呼びかけ詞「あんた」とフランス語の心的与格」

12月例会

黒谷茂宏「受難・運命・因果：se faire + inf.構文の意味論と文化化」

1月例会

水野晶子・藤村逸子「身体部位名詞を伴う再帰構文における格の問題 ロシア語とフランス語の比較」

2月例会

山本大地「フランス語における感嘆文について」

この4月から世話役が交替しましたが、従来通り、関西の方の情報交換の場としてみなさんのお役に立ちたいと思っています。研究発表だけでなく、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども大歓迎です。発表を希望される方は平塚か大久保までご連絡ください(関西の方に限らずどなたでもどうぞ)。

平塚：hiratuka アットマーク cc.kyoto-su.ac.jp

大久保：tomonori アットマーク yo.rim.or.jp

8. 追悼

昨年11月に三宅徳嘉先生、年が明けて2月には田島宏先生が相次いで亡くなりました。ゆたかな学識と知的謙虚さをあわせ持たれた両先生は後進の指導にも心をくだかれ、直接・間接に影響を受けた会員は数多いと思います。親交が深かったお二人の会員に私的な思い出もまじえて追悼のことばを書いていただきました。

~~~~~

三宅徳嘉先生 追悼

三宅先生は僕にはほとんど伝説上の存在であった。加藤周一著『羊の歌』に現れる戦時中の東大仏文研究室の若き「三宅君」は、すでに歴史上の存在であった。高校時代にフランス語の恩師から、三宅先生の17世紀フランス演劇の造詣の深さについて耳にし、あこがれた。大学入学後も三宅先生の偉業はいたるところで聞いた。『スタンダード仏和辞典』の正確な発音記号表記。あのプチ・ロベールも『スタンダード』の発音表記を参照していたという逸話。しかし「三宅徳嘉」の名前は耳にするものの、その著書を読んだことがなかった。「分かっていることは書く必要がない。分からないことは書けない。三宅先生はそういう先生なんだよ。」とある先輩から聞いた。そんな先生と実際にお会いする機会を得たのが日本フランス語学会の例会の席であった。しかしご挨拶を申し上げるのがやっとなで、実際に先生に親しくご指導いただいたのは『白水社ラールス仏和辞典』の仕事に参加してからだった。白水社の辞書編集室で原稿を見ていただくようになり、先生の存在はいわば単純過去ではなく、僕には現在形と複合過去の織り合わせになった。先生は「こういう原稿が欲しいんだよ」とおっしゃり、ventの手書き原稿を参考に見せてくれた。(ventは誰が書いたって風じゃないですか。)と内心想うのだが、先生は違う。風はまず〔自然現象〕としての風である。(例Aujourd'hui il fait du vent.)そしてventと結合しうる動詞、形容詞、フランス語の風の種類、慣用表現を挙げていく。次にventは(扇風機・プロペラなどの)風とある。Fais du vent avec ton éventail!(扇であおいでくれ。)語義の説明は単に詳しくはいいいのではない。単に日本語に当てはめればいいのではない。先生は仏和辞書と仏和(和仏)辞書とは根本的に異なるとお考えだった。「フランス人には無意識に使えることでもエトランジェであるわれわれには分からないことがいくらでもあり、そこを少しでも最新の研究成果(それとてまだほんのわずかな部分しか解明されていない)を取り入れること。日常の表面的な用法を記すにしても、その語の全体の用法を頭に入れて(できれば歴史的なそれも含め

て)、その語を使ってフランス人がどういう事象をどういう立場から把握し表現するかをできるだけ掘り下げたうえで記述すること。」と私信をいただき、先生の学問に対する精神の厳しさと謙虚さに頭が下がる思いがした。先生との仕事は妥協のない戦いであった。どんな原稿も赤で訂正、修正、加筆がびっしりであった。「そうじゃないんだな、君はギョームの*chrono-genèse*を直接フランス語の文法カテゴリーとしての (sémantico-sémiologiqueな) 時制の生成と理解しているが、ギョームは*sémiologique*なレベルの前の*psychique*なレベルを問題にしているんだよ。」辞書を越えた議論になる。仕事が終わって駿河台下の寿司屋でさらに話の続きをお聞きする。先生はアリストテレス、中世哲学、デカルト、それにパリでのギョームの講義風景、お話しになったマルセル・コーエン、マルチネ、ポチエとの交流、その他諸々のことをお話くださった。先生の言語観と学識が狭い文法研究を越えてユマニテそれ自体に対峙していることをはっきり知る濃密な時間だった。先生はユマニテと対話しているのだ。そう実感した。

今、先生は神の国に一歩近づきユマニテについてさらに新たなお考えをされているに違いない。先生のご冥福を心よりお祈りします。(青木三郎)

~~~~~

田島宏先生の思い出

朝倉季雄先生、三宅徳嘉先生の後を追うようにして2月4日、田島宏先生が亡くなられた。リハビリの甲斐あって快方に向かわれていた矢先での訃報だけに残念でならない。

三人の先生方とは月一回開かれた仏和辞典の編集会議で一緒させていただき、またもちろん、ご著書や語学会の例会でのやりとりなどを通して、さまざまなことを教えていただいた。仏語学を専門とする者にとってこれ以上の幸運はなかったと思う。朝倉先生からは簡単に見えることが実はいちばん難しいという事実を教えていただき、三宅先生からは突き詰めるとはこういうことと具体的な形で教えていただいた。では田島先生からは?一言で言えば、「フランス語が好き」ということの大事さである。

浅草生まれの生粋の江戸っ子でいらっちゃった田島先生は、生後一ヶ月も経たないうちに関東大震災に遭われた。少時より暁星でフランス語を学ばれたが、1943年、学徒出陣で海軍に入隊。そのときの体験から、同時多発テロと対テロ戦争にからめての次のようなご発言が出てくる。「(...) かつての日本が持った<敵性語>などという概念とは全く逆に、世界がお互いに理解し、話し合える唯一の道具である<ことば=外国語>の学習こそが、世界平和に直結する道だということを、この際ぜひ強調しておきたい。それは、フランス語の勉強を思うようにやらせてもらえず、逆に、いわゆる学徒兵として、私自身が直接参加を強要させられた第2次世界大戦の苦い体験からの発言である。」(「日本のフランス語教育 戦後50年を顧みて」『フランス語教育』30, 2002年5月, 所収)

この日本では、フランス語などは時代の流れでたちどころに消し飛んでしまう存在であることを身に沁みて知っていらっちゃった先生のお言葉は、そのような懸念が現実

なりかけている現在、ますますその重みを増している。学会を盛り立てられ、語学雑誌の創刊に力を尽くされ、辞書の仕事に精魂を傾けられ、仏検にも積極的にいかかわられたのは、すべて大好きなフランス語を守るための、先生のあの手この手だったのである。

卒論および修論指導、大学院の授業で読んだグレマスの訳書の刊行、上述の辞書の編集、『コレクション・フランス語』の執筆といった研究や仕事から思い出でだけでなく、留学先・滞在先まで訪ねてきてくださってのレストランでの会食(もちろんご馳走して下さったが)、フランス語教員野球(学生のころ野球部で活躍された先生は、最年長ながら見事な打撃を披露された)、殊に時ならぬ春の雪に見舞われた西部球場での先生の引退試合、9・11直後の9月20日、オペラ・ガルニエの正面2階席に先生ご夫妻をご招待しての(後にも先にも一回きりのご招待になってしまったが)、ラッヘンマンのオペラ「マッチ売りの少女」の観劇など、先生との思い出はすべて楽しいものだ。先生はどんな難題にも解決法を見つけてくださり、励ましてくださった。野球でも名センター、名監督でいらっしやっただように、フランス語学界にとっても総指揮官のような方でいらっしやっただ。

自衛隊のイラク派遣が着々と進む中、先生は不帰の客となられた。棺に納められた先生の左胸のあたりには黄色い仏和辞典がそっと置かれていた。先生は下界に目をやりながら、今も辞書の改訂作業に動しんでいらっしやるに違いない。(鳥居正文)

9. フランスの若手・中堅研究者紹介

フランス語学の諸分野も、最近とみに若手・中堅研究者の活躍がめざましいようです。ここでは、日本ではまだまだあまり知られていないが、精力的な研究活動をとおして将来性を感じさせるフランスの気鋭の研究者を4人紹介していただきました。

~~~~~

#### Franck Neveu (Université de Caen)

テキストという大きな流れの中でことばがどのように機能しているか。また、ことばがどのようにテキストをつくりあげているか。そのような視点から言語を考えている研究者の一人にFranck Neveuの名前を挙げるのができよう。Neveuは、40代に入ったばかりの若さとはいえ、既にナント大学、パリ第七大学で教鞭をとり、現在はカン大学言語学科の教授(2002年より)として学生を指導する一方、CRISCOの主要メンバー、またASL (Association des Sciences du Langage)の会長としても、コロックの企画、研究誌や*Dictionnaire des sciences du langage* (2004, Armand Colin)の編集に精力的に携わっている。

Neveuの研究を知る上でのキーワードは、同格、二次的述定、*idiolecte*、テキストにおける情報構造、文法概念の考察などであるが、代表的な著作の一つに、1993年Hervé-D. Béchadeの指導のもとパリ第四大学に提出した博士論文を加筆、修正して出版した*Études sur l'apposition* (1998, Honoré Champion, 全286ページ)がある。その中でNeveuは、

Bakhtineの流れをくむJean-Michel Adamのテキスト分類に基づき、macrosémantiqueという観点から、サルトルの自伝エッセイを資料体として同格の分析を行った。とりわけ同格項が前置されるタイプの同格はテキストの連続に関して重要な役割をもっていること、また同格はサルトルの文体を特徴付けるidiolecteのひとつではないかということなど、興味深い指摘がちりばめられている。

最近の研究対象は、ひとつには、分離形式であり、その成果は昨年出版された*Cahiers de Praxématique*40号«

Linguistique du détachement»における呼格の分析にもかきい見ることができる。また、文法概念についても考察を深め、現在チュニスのラマヌバ大学のSalah Mejriと共同で編集を進めている*Langages* "La tradition grammaticale : une approche épistémologique" (2005年末もしくは2006年刊行予定)では、様々な言語に関して文法概念の問題を取り上げるようだ。

最後に、個人的なことだが、数年前不躰にもいきなり手紙を出した一学生にすぐさま快く博士論文を貸してくれたこと、また今回もこの文章を書くにあたってメールで何度も質問を投げかけたのに対して毎回丁寧な返答が迅速にかえってきたこと。研究者としてのみならず、人間としても信頼できる魅力的な人物であるということをつけ加えておく。(中尾和美)

~~~~~

Marion Carel (EHESS)

フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)で教鞭を取るMarion Carelは同研究院の名誉教授Oswald Ducrotの業績を継承発展させているが単なる祖述にとどまらず、豊富なアイデアは師を凌駕する勢いで、精力的に研究を発表している。彼女がEHESSで本格的なセミナーを始めた時期がちょうど筆者が留学した時期と重なり、気さくな人柄と精緻を極める論証に魅了され、毎回の授業が楽しみであったことを懐かしく思い出す。

Marion Carelはまず純粋数学の教育を受け、agrégationを取得、ナンテールで教鞭を取る傍ら博士論文を準備し、1992年に学位論文Vers une formalisation de la théorie de l'Argumentation dans la langueを完成させる。その後EHESSにmaître de conférencesのポストを得て現在に至る。

日本のフランス語研究者に紹介したい旨をメールで伝え、いくつかの質問を投げ掛けてみたところ快く答えていただいた。以下はそれを一問一答形式に書き直したものである。

言語学に興味を持つようになった経緯は？

agrégation取得後は、純粋数学を続ける意欲を失った。余りにも閉鎖的な世界に感じられたからである。そのため数学を応用できる分野を探していたが、まず論理学者Bernard Jaulinと出会い、次いでOswald Ducrotと接することで言語学を志すことにした。

影響を受けた言語学者、思想家などは？

Ducrot以外ではFrançois Récanatiの方法論に影響を受けた。また中世の論理学者の著作を愛読し、とりわけAbélardに強く共感する。

Ducrotの業績に対する自分のオリジナリティーは？

まずpourtantの分析において、Ducrotはそれをdoncの複雑

な組み合わせとして記述したが、自分はpourtantがdoncに還元できない点を明らかにした。またDucrotのtopoiの概念にかわる意味論的「ブロック」の概念を構築した。さらに、Ducrotのargumentationは発話の外部に展開するものだけであるが、自分は発話の内部に展開するものも存在すると考えている。

現在進行中の研究は？

Ducrotのポリフォニー理論と自分の理論の接点を探っている。また、論理学で問題になる推論の一種 abductionについて論文を執筆し、特に" Il fait beau donc Jean doit être sorti"と"Jean est sorti donc il doit faire beau"の共通点と相違点について論じた。(喜田浩平)

~~~~~

#### Olivier Bonami (Université de Rennes II)

Olivier Bonamiは現在レンヌ第二大学でMaître de Conférencesを勤める。パリ第七大学でJean-Marie MarandinとDanièle Godardとの共同指導の下、1999年にLes constructions du verbe : le cas des groupes prépositionnels argumentauxと題する論文によって博士号を取得している。在学中から共著を含め活発な論文発表を行っており、現在の関心は、統語論と形式意味論(とくにHPSG(主辞駆動句構造文法)、屈折の形態論、意味と統語のインターフェイス、フランス語文法である。

Bonami(1999)はタイトルの示す通り、動詞とその補語となる前置詞句の研究である。タイトルに現れるargumentとしての前置詞句とは動詞の意味論の中に組み込まれた前置詞句であり、動詞の意味論の外にあり情報を追加するタイプの前置詞句ajout(付加詞)と対立する。著者の関心の対象はargumentであり、それが動詞と相互依存の関係にあることを明らかにし、argumentとしての前置詞句を伴った動詞の意味の構築(construction)の問題を詳細に論じている。

理論的枠組みとして、80年代から90年代にかけてのアメリカの形式意味論の発展(Gawron, Barwise & Perryの状況意味論、Pollard & SagのHPSG、Pustejovskyの生成語彙論)の影響を直接的に受けているが、単なる受容に終わらず、フランス語のデータの説明に有効な道具として利用されている。英語と仏語の違いにも意識的であり、著作はアメリカの形式意味論の仏語での紹介以上の意義を持つ。

Bonamiは博士論文を含む一連の研究で、語彙が統語論と意味論の両方の影響を受けていること、語彙をコンテキストから切り離さず、相互依存的に組み合わせられた環境を含めて記述することの重要性を強調する。形態論に属する屈折語尾の研究でも、語幹と語尾の組み合わせによる意味の「構築」という観点から論じている。すなわち「構築」とは組み合わせられた表現全体の意味が構成要素の単純な(語彙論的な)和から導き出せない場合を指すのである。

米国の90年代の意味論の進展をリアルタイムで吸収し、仏語のデータに基づき理論を吟味し、成果を仏語だけでなく英語でも発表していることから、Bonamiは新しい世代を代表する研究者であると思われる。交流は相互的であり、米国のPustejovskyなども仏語のデータを著作中で考慮している。なおBonami(1999)を含む彼の論文の多くは

<http://www.llf.cnrs.fr/fr/documents.html>で読むことができる。  
(伊藤達也)

**Patrick Dendale** (Université d'Anvers)

Patrick Dendaleはアントウェルペン(アントワープ)大学の助教授で、ベルギー言語学サークル Cercle Belge de Linguistiqueの会長。メス大学でも講義を担当したり、研究グループにくわわっている。

*Le marquage épistémique de l'énoncé. Esquisse d'une théorie avec applications au français* と題した博士論文を、Liliane Tasmowskiの指導のもと、1991年にアントウェルペン大学に提出した。その延長で、pouvoir, devoirなどの準助動詞や、条件法などの、認識的モダリティにかかわる領域を主たる研究対象としている。コロックを組織して、論文集を編むといったしごとを精力的にしている。

おもな論文は、『フランス語学研究37』所載の文献案内で紹介したが、その功績は、Tasmowskiとともに、証拠性 *évidentialité* の概念をフランス語学に本格的に導入し、これまで認識的モダリティとして論じられてきた問題を、証拠性の問題としてとらえなおしたことにある。たとえば、devoirのいわゆる認識的用法の分析においては、それを必然的モダリティのマーカーであるとする従来の通説を否定し、前提の構築・推論・結論の評価による命題の単一化という、情報の創出過程が存在することをあらわす、という仮説を提出している。彼によると、認識的モダリティのマーカーとされてきたものは、ほとんどすべて証拠性のマーカーとして再定義しなければいけないということになり、その当否には異論もあるが、古くから論じられてきた対象のあらたな側面に光をあて、議論をひきおこしたことは大きな学的貢献であるといえる。

Dendaleの行論は、徹底した実例主義に特徴がある。論文には収集した豊富な実例を引き、その文脈の特徴の微細な観察から、帰納的に仮説を証明してゆく手法である。この方法は、ともすると、観察する範囲にかざられた現象のみを本質的なものとしてひろいあげてしまうおそれがあるが、もっぱら思弁的な理論構築にくらべたとき、どちらがより言語現象に即した議論であるかはいうまでもない。じっさい、彼の論文によって、いままでかならずしも着目されなかったマーカー間の対比がつまびらかになった例も多い(たとえば、推測をあらわす *devoir* と単純未来のちがい)。

そうした意味で、研究テーマに興味のあるひとだけでなく、研究手法のひとつの例としても、かれの論文は読む価値があると思われる。

なお、Dendaleのホームページはつぎのところにあり  
<http://www.uia.ac.be/u/pdendale/> (渡邊 淳也)

## 10. フランスのメーリングリスト紹介

フランス、主にパリ地方の言語学者が情報交換に利用しているメーリングリスト(以下ML)を二つ紹介させていただきます。ひとつは、RISC(Relais d'Information sur les Sciences

de la Cognition, 1992年発足)によって運営されているEchosです。2004年3月現在、会員数1335を数えるEchosは、運営するRISCの名称からも明らかなように、言語学専門のMLではなく認知科学全般に関する情報を扱ったMLです。言語学から認知心理学・神経生理学・コンピュータサイエンスや人工知能、はてはロボット工学に至るまで幅広い分野をカバーしており、様々なセミナーや講演(主にパリ地方)、世界各地の学会情報や新刊書籍の紹介、Postdoctoralの公募、大学の教員募集などについての情報がやり取りされています。mailでの使用言語は英語とフランス語で、ポストされたメールは一度管理者によってチェックされた後、リスト登録者に配信されます(技術的な管理はEcole Normale Supérieureで行われています)。Echosに登録を申し込むには、原則として氏名・メールアドレス・所属研究機関・住所・電話番号・専門分野・身分(学生か研究者かetc)を記したメールを [risc@idf.ext.jussieu.fr](mailto:risc@idf.ext.jussieu.fr)宛てに送ります(投稿用アドレスは別にあり、これは登録を確認する管理者からのメールに記載されています)。Echosには1日10通前後のポストがあります。

もうひとつのML、Parislinguistsは会員数206、ポスト数も週に15通前後と、比較的小規模です。CNRSとParis8の共同研究ユニットにより運営され、その名の通り主にパリ地方の言語学者のMLとして、パリでの言語学のセミナーや講演、世界各地で開催される様々な言語学会に関する情報などが配信されています(Echosからの転送記事も多くあります)。ヤフーfiの自動MLシステムを利用していますので、登録にはメールアドレスだけを本文に書いて [parislinguists-subscribe@yahoo.com](mailto:parislinguists-subscribe@yahoo.com)に送ります(折り返し、確認のメールが来ます)。

フランス、とりわけパリに滞在する学生・研究者にとって、セミナーなどの情報入手は欠かせません。研究機関の多いパリでは、毎日どこかで何らかのセミナーがあります。また、海外に住む研究者にとって有用なのは、学会の開催告知でしょうか。フランスではテーマごとに学会の開催されることが多く、発表するにも参加するにも自分の研究内容にふさわしい学会を探さなくてはなりません。この二つのMLでは学会の発表者募集の告知も頻繁にあります。EchosもParislinguistsも海外からのアクセスが可能です。いずれのMLも情報配信の場であって、frenchlingのようなinteractiveな議論の場とはなっていないようです。

(小田涼)

## 11. エッセー：電子辞書の光と影

今年の新学期からフランス語の授業で私は紙の辞書の他に電子辞書も紹介しはじめた。昨年フランス語初学者向けの辞書が二種類、電子辞書に搭載され、試しに使ってみたら非常に便利で驚いたからだ。なにせ辞書が十数冊も入っているのに軽く、値段もその割には手頃だし使い勝手が良い。ちなみに一年生の初級クラスで電子辞書を持っている

かどうか聞いてみたら、もちろん英語ののだが、全員が持っている」と答えた。町の本屋さんになぞねると中高は受験校ほどまだ紙辞書を推薦するという。確かに初学者や受験勉強には線が引けて前後が目に入りやすい紙辞書のメリットは大きい。だがその先のレベルになれば電子辞書を選ぶ人が確実に増えるのではないかと。すぐに、どこでも、多種類の辞書が引ける便利さは一度慣れたら捨てがたい。これにもし上級者向けの辞書が搭載されたり、カード式に追加できるようになったら、多少値がはっても上級者や専門家は欲しくなるに違いない。

これが昨今の日本だとすると、フランスはどのようなのだろうか。Fnacのサイトでdictionnaire électroniqueで検索するとズラズラ出てくるのは辞書のCD-Rom版で、電子辞書はまだ少数だ。そもそもパソコン上で使うCD-Romと冊子体の電子辞書はたとえ中身が同じでも異なる製品だ。フランス語でこの二つをどう呼び分けるのか気になるところだ。機種が少ないのに「つきあいの場で秀でるため」の引用句電子辞書がすでに発売されていたりするのフランスらしくて楽しい。動詞活用とスペルチェック機能がほとんどの機種に付き、さらにscrabbleなどのゲームが売り物のひとつになっているようだ。では実際どのくらい普及しているのだろうか。留学中の方や現地に旅した人たちの情報によれば、フランスでは電子辞書はまだほとんど普及していないらしい。店頭にもないか、あっても売り場は小さく店の関心も低い。コンテンツも辞書1冊きりが多く、表示も8行どまりなのに値段は安くない。実際に購入したわけではないから断言はできないが、日本の電子辞書のように紙の辞書に取って代わるような高性能ではなさそうだ。

つまりフランスの現状はひと昔前の日本に近い。この違いはハイレベルな日本の技術によるのだろうか。もちろんそれもあるに違いない(正直ちょっと誇らしい)。それに加えて日本では、伝え聞くところによると、搭載する辞書類のロイヤリティ(著作権使用料)がメーカー側に激安で提供されたことが大きいようだ。日本の電子辞書の歴史に詳しい関山健治氏が言うように、電子辞書の出始めは「電子化された単語集」のようなものであった。画面も数行で使い勝手が悪い(<http://members.tripod.com/~sekky/edichist.html>)。「こんなものはどうせ売れない」と出版社側は紙辞書の価格と比べればごくわずかなロイヤリティでメーカーに売ったらしい。(もちろんロイヤリティについては極秘で条件もさまざまではあるようだ。だが電子辞書が普及するにつれて出版社側が潤ったという話は聞こえてこない)。メーカー側はこうして価格を抑えながらコンテンツを充実させることができた。それがさらなる普及と巨大マーケットの出現を促したのだろう。出版社側はいわば時代の流れを読み損ねたことになるが、激動のこの時代に、誰が確実に未来を予測できるだろう。フランスと日本での普及の違いは、著作権に関する社会意識や価値観の違い、さらには辞書になにを求めるとかという文化的な違いも関わって

いるようだ。

だからいま電子辞書が売れて儲かるのはもっぱらメーカーということになる。そのぶん紙辞書は売れなくなるから出版社の財政は厳しくなる。だが、電子辞書もすぐれたコンテンツを搭載できなければただの箱にすぎない。良質な辞書をつくるには、その言語の何に重きをおいて記述するかという明確な編集方針と、それを具現化するための専門家と編集者の共同作業が欠かせない。膨大な時間とコストがかかるのだ。あまりに不平等な契約のもとでは出版社は新しい辞書を作る財政的余裕を持ちえなくなるだろう。それは将来的にメーカー側にとってもマイナスなはずだ。不平等契約を改めていくため、出版社側にはねばり強くしたたかな交渉を通してメーカー側の認識を変えていく努力が求められるのだろう。

目に見える形で成果があらわれるには長い時間がかかる人文系の学問は、効率と利潤追求の論理とはなじみにくいところがある。外国語教育や一般教養の軽量化などの風潮と、日本の電子辞書におけるソフト軽視・ハード重視の現状はつながりがあるように思われる。フランス語を志した者の一人としていろいろと考えることが多いゴールデンウィークだった。

(藤田知子)

#### 編集後記

例会と学会誌による情報提供の隙間を埋め、読まれればまもなくどこかに紛れてしまうNews Letterですが、だからこそ気楽に書いて気楽に読める良さがあります。楽しんでいただけましたでしょうか。

昨年度のNews Letter担当者に頼まれて気軽にお引き受けしたものの、軌道に乗るまで相当時間がかかりました。でもその間、若い方をはじめさまざまな会員とやりとりし、この学会は小粒ながらもぴりりと辛く人間的で豊かな可能性をもっていることを実感し励まされました。発行にこぎつけることができたのはそうした方々のご協力によるものです。心から感謝いたします。

最後に本号のレイアウトと印刷を引きつづき担当してくださった東郷雄二編集委員にお礼を申し上げます。

(藤田知子)

本号を含むNews Letterのバックナンバーは日本フランス語学会のホームページでも読むことができます。

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

メーリングリストfrenchlingの加入申し込み先は次の通りです。

f-ling-admin **アットマーク** french.lang.osaka-u.ac.jp



